

日本がん疫学研究会

変るもの、変らぬもの

かつてはがん刺戟説と内分泌環境説、現在は環境要因と宿主要因という風に用語は異なるが、発がんの成因や寄与度をめぐり、くり返しくり返し論議がつづけられた。今日は両者の Interaction を全く考えないで論議されることはなくなった。これは染色体学、免疫学、Oncogeneなどの研究の進歩があったからであろう。肺がんとも最もよい疫学的関連をもつシガレットについても、重喫煙者は必ずしも肺がんで死亡しない事実の研究がつつづけられているのもそのあらわれである。

疫学は possibility と probability を測定する学問であり、それ以上の役割を分担するものではないかもしれないが、がん原性要因に対する個々の修復能力を集団としてもう少し確かなものとする必要があろうし、環境要因相互間の相加的、あるいは相殺的な作用一複合作用を明らかにすることも要求される。

基礎医学の進歩は著しい。また環境条件の変化によって、個体そのものの反応性がかなりに変化していることは、死亡年齢や病の発生頻度の年齢別分布の激しい変化がこれを示唆している。宿主要因のどの部分が変わり、どの部分が変わらないかの研究も著手する必要がある。

疫学で現在もとめられているのは、科学的な方法で orthodox な研究をつづけることと、新しい境界分野へのチャレンジであるが、両者とも不十分である。がんの生物学的特性を十分に考えてから研究にとりかかり、分析し、考察することが基礎であり、変るものと変らぬものとを厳しくみきわめることは今も昔も変りはない。

日米癌研究協力事業

Statistical Methods
in Cancer Epidemiology

March 1 and 2, 1984

RERF, Hiroshima

癌の疫学的研究における統計学的方法を主テーマとした日米癌研究協力事業にもとづくセミナーが昭和59年3月1日と2日の2日間に亘って開催され、極めて充実した討議が行われた。

まづ、日米協力癌研究計画の現在の機構と、とくに統計学的研究を主題とした会合や討議が歴史的に展望された。(平山) 癌の疫学研究における統計学者の役割について、癌の疫学研究者を臨床医学と数学を両極端とする直線上に配列し、同じく疫学者といっても臨床家に近い立場の者と数学者に近い立場の者が存在することが示され、それらが互いに協力し合う必要性が強調された。(Miller)

第1セッションの記述疫学分野では癌地図の統計学的分析が主題となり、高率地域が互いに隣合う確率が偶然を越して有意に高いか否かをカイ自乗法やモンテカルロ法で吟味する方法が示され、それによると食道癌、子宮頸癌は地域的に集積するが、膀胱癌、乳癌の地域集積は偶然の範囲内であることが判る。このように肉眼による印象が統計的に整理されることは重要と考えられた。(大野)

また、単位地域を融合させ最も地域差を明白に示す地域単位とする統計学的方法も示された。(青木、水野) 多次元のデータについての多因子分析成績の効果的な図示法が示された。(脇本)

第2セッションは患者対照比較研究で、近年の統計学的研究の進歩によって、従来重視されていた『対照群を選ぶ際、患者群と諸因子のマッチした群を選ぶべきだ』ということが、それ程効率の高い方法でないこと、年齢群マッチで十分な場合が多く、分析の段階で諸因子の関与度を検討すべきとされた。複数の要因が重なったときの寄与危険度の統計学的処理方法が示され、寄与危険度は原因分画というより予防可能分画とみるべきと提唱された。(Breslow) また、患者が死亡している場合、対照群としても死亡者を選ぶことがあるが、その際、配偶者や友人に問診することによる誤差の諸実例が示され、とくに喫煙の影響は Underestimate されることになる可能性が強調された。(Blot) 高度喫煙者は、食生活も中等度の喫煙習慣者、非喫煙習慣者と有意に異なっていることを示す統計が示された。(青木、平山)

第3セッションは追跡研究で、日本での大集団の16年間の長期観察研究によって、喫煙、栄養などがどのような癌にどのように相互に重なり合って作用しているか、癌リスクを下げる最も効果的方法などが統計学的分析で示された。(平山) 分析に当たって、観察対象集団の合計値を標準値とするか、集団外の値(例えば全国値)を選ぶか、その得失が論じられ、また諸因子が重なりあっている影響が相加的か相乗的か、それとも別の形かを分析する方法と実例が示された。(Breslow) 広島、長崎の被爆者を長期追跡、癌死亡率を検討、その資料の統計処理法も論議された。(加藤、Kopecky) つぎに、癌登録において記録照合を電算機で行う方法が詳しく紹介された。(藤本)

第4セッションは臨床的研究とスクリーニングで、臨床研究、発癌実験成績の分析などに統計学的方法が役立った実例などが示された。(柳本) 癌の自然史、とくに早期胃癌が臨床発病し、死亡する過程の統計学的分析や、肝癌がウィルス持続感染に諸因子が重なって発病していく過程の分析などが示された。(大島) 集団検診の効果の評価方法、とくに Lead time bias, Length bias 両方の処理方法についての最新の統計学的研究が紹介された。(Morrison)

最後に、これから生物統計学的方法を癌の疫学に活用させるに当たっての制度的問題点などが論議された。(重松)

癌研究を進展させるためには多くの分野の科学の関与が必要であるが、統計学もその一つで、実験的研究、臨床的研究、疫学的研究のどれに対しても統計学は重要な貢献をする。日米癌研究協力計画の中でも統計学活用の必要性は再三討議され、米国国立癌研究所の Dr. Blot は1976年にこの計画にもとづいて日本に派遣され、とくに、生物統計学講座の必要性をその報告の中で強調した。また、1978年5月、同じくこの計画の一貫として開催された『人癌研究における生物統計学』日米セミナー(於広島)では、日米双方から、癌研究に活用される統計学的方法とその実例が発表され、充実した討議がなされたが、この際にも、日本において生物統計学は、教育システムとしても、研究者の数と質においてももっと強化する必要があることが論じられた。

今回、同じく広島の放線線影響研究所で開催された『癌の疫学における統計学的方法』と題する日米協力会議では前回以降新しく発展した統計学的方法が展望されたが、結論はやはり同様で、6年前の日米協力会議以降、学術会議の勧告等たしかに進歩はあるが、実質的改善は殆どなされていないと評価された。困難な事情は多いと考えられるが、日米の現状を比較すると、これからの癌研究の水準を上げる上でも生物学統計学講座の設立と優れた生物統計学者育成は急務と考えられる。

以上、新しい統計学的方法とその応用例が各種の癌について様々な角度から検討され、貴重な情報が交換され有意義であった。日本の若い疫学研究者が各大学から多数傍聴しており、それらの人々の今後の研究への影響も大きいと考えられた。

(平山 雄)

The 4th Symposium on Epidemiology and Cancer Registries in the Pacific Basin

January 16-21, 1984
Kona, Hawaii, USA

この会議は Prof. B.E. Henderson (Director, K. Norris Cancer Institute, University of Southern California) の主催になるもので今回は第4回にあたる。

会場は人里はなれたハワイ島の Royal Waikoloa Hotel であり、下に示すプログラムで充実した発表と討論があった。

テーマは Diet, Lifestyle, Hormone, Radiation といった病因追求のほか、基礎的な資料としての Cancer Registration や Screening Program の問題も討議された。主題以外は Poster session として発表された。

会期中、午後の2時間を限って4つのテーマで working group による discussions が企画され、最近の話題についての data をめぐって small group で討議がされ、内容の高い報告がまとめられた。

将来わが国もこの様な内容のこい討論をもつ必要が痛感されたが、そのためには疫学以外の研究者と論議できる場を用意することも必要と考えられる。

●16日(月)

Welcome and Introductions

●17日(火)

Cancer Incidence among Ethnic Populations
in Different Areas of the Pacific

(Chairperson : Y-H Zhang)
(Rapporteur : M. Yu)

| | |
|--|--------------|
| Chinese (China, Hong Kong, Malaya, Singapore, Hawaii, Western U.S.) | C-Y Li |
| Japanese (Japan, Hawaii, Western U.S.) | S. Tominaga |
| Filipinos (Philippines, Hawaii, Western U.S.) | L. Kolonel |
| Anglos (Alaska, British Columbia, Western U.S., Hawaii, Australia, New Zealand, New Caledonia) | D. Thomas |
| Hispanics (Los Angeles, Mexico, Colombia, Bolivia, Peru, Chile) | T. Mack |
| Polynesians and Melanesians (Samoa, Fiji, New Caledonians Papua New Guinea, Hawaii, Los Angeles, Micronesias) | B. Henderson |

WORKING GROUPS (午後)

●18日(水)

Progress in Cancer Research in the
Pacific Basin

I. Studies of Diet and Cancer

(Chairperson : K. Aoki)
(Rapporteur : R. Ross)

| | |
|---|--------------------------------------|
| Micronutrients in relationship to stomach cancer precursor lesions | W. Haenszel |
| Recent developments in stomach cancer epidemiology | P. Correa |
| Diet and Large Bowel Cancer | A. McMichael |
| Dietary Fat and the Risk of Colorectal Cancer | G. Stemmermann |
| Vitamin A/ -Carotene and Cancer in a Cohort of Retired Persons in So. California | R. Ross B. Henderson |
| Vitamin A and Other Micronutrients in Relation to Cancer in Hawaii | L. Kolonel J. Hankin A. Nomura |
| Cancer Risks in Relation to Diet and Other Factors in a Prospective Cohort in Japan | T. Hirayama |

Cancer and Vitamin A
Consumption in Brazil

J. Buckley

Progress in Cancer Research
in the Pacific Basin

II. Cancer Related to Occupation and Radiation Exposure

(Chairperson : J. Fraumeni)
(Rapporteur : R. Prentice)

| | |
|--|-------------------|
| Uses of a Cancer Registry to Assess Occupational Cancer Risks | J. Peters |
| Multiple Cancers among Uterine Cancer Cases in Osaka | I. Fujimoto |
| Occupation and Maxillary Sinuses Cancer in Hokkaido, Japan | K. Fukuda |
| Medical and Dental X-ray | S. Preston-Martin |
| Exposure and Risk of Head and Neck Cancer | M. Yu |

●19日(木)

Progress in Cancer Research in
the Pacific Basin

III. Cross-Cultural Comparisons

(Chairperson : B. MacMahon)
(Rapporteur : A. Smith)

| | |
|---|--|
| Breast Cancer Among Women in Japan and Hawaii | A. Nomura T. Hirohata L. Kolonel |
| Lung Cancer among Women in Japan, Los Angeles, Hawaii and China | H. Shimizu A. Wu, L. Koo Y-T Gao L. Kolonel |
| Malignant Melanoma in Australia, San Francisco and Los Angeles | D. Austin T. Mack |
| NPC in Malaysia and Hong Kong | M. Yu W. Armstrong J. Ho |
| Liver Cancer in China, Hong Kong and Los Angeles | J-Y Tu M. Yu |
| Cervical Cancer Findings in the WHO Collaborative Study of Neoplasia and Steroid Contraceptives | D. Thomas |

Cytology Screening in Prevention
of Cervical Cancer

C. Cuello

Religion and Cancer in Los Angeles

H. Berkel

WORKING GROUPS (午後)

●20日(金)

Progress in Cancer Research
in the Pacific Basin

IV. Chemoprevention Trials

(Chairperson : T. Hirayama)
(Rapporteur : A. Nomura)

| | |
|--|-------------------|
| Rationale and Design of Chemopre- vention Trials in Seattle | R. Prentice |
| Rationale and Design of Chemopre- vention Trials in Lin Xian, China | C-Y Li W. Blot |
| Discussion of Chemoprevention Trials | B. MacMahon |
| Reports from WORKING GROUPS | |
| Cancer Registration | D. Austin |
| Diet | L. Kolonel |
| Other Lifestyle | R. McMichael |
| Hormones | N. Weiss |
| | J. Fraumeni |
| Conference Summary | B. Henderson |

アジア諸国とのがん共同研究

すでに前号でのべた様にアジア各国間でのがんの比較研究は単一な ethnic group での研究より、はるかに効果的であることは日系米人の研究からも伺いしることができる。

今回文部省の海外調査の一環として、アジア7か国を訪問または研究者との話し合いで得られた結果をまとめると以下のようである。

東南アジアでは radiation を中心とした治療研究（化学療法もふくめ、が主体であり、その他第2次予防として子宮がんの Screenig がかなりに行われている。しかし伝染病による死亡が尚高率であるので、がん研究は漸く緒についたという国が多い。Singaporeと香港は早くから Cancer Registry がきめ細かく行われ、がん研究のレベルも極立って高い。

タイ国、インドネシアでは研究者もようやく増加し、研究費を導入すればかなりの成果があがることが期待される。それは治療のみでなく、基礎的研究の人材が除々に育ちつつあるからである。

韓国は国内57教育病院が定期的に会合をもって新しい研究態勢の確立を急いでいる。がん死亡は着実に増加していることもあり、がん登録も病院を中心に整備されつつある。基礎的ながん研究もいくつか発表されるようになった。特筆すべきはすぎましい研究意欲であり、1988年のオリンピックを意識してか5年前とは見違える様に人心がスマートになりつつあることである。ライフスタイルがわが国と似ており、またかなり異なることも共同研究には利点である。

発がん研究の一重点である食生活については、食品の種類よりもその加工法や調理法が極めて地域性がつよいということである。すでに鼻咽癌がんでは、生干しの魚を離乳期につぶしてかゆにまぜて与えることが原因の一つとして明らかにされているが、魚の加工、調理は各国毎に比較することは重要であり、そのがん原性、変異原性の研究も急ぐ必要がある。問題のペーテルナツも店頭にあり、かびの多い食品も少くはない。ただ東南アジアでは、その数多い果物の意義も小さくないものと思われる。

生活習慣は代々うけつがれたものであるが、なかなか変化しないのはどの国でも同じであるが、一方若い世代はどんどんアメリカ風の生活に変わっており、比較研究は現時点が重要と考えられた。中国については次回報告したい。

(青木国雄、富永祐民)

The Second UICC Conference on Cancer Prevention
In Developing Countries

Kuwait, December 1-4, 1984

Dear Colleagues,

The 2nd UICC Conference on Cancer prevention in Developing Countries will be held in Kuwait in December 1-4, 1984. The conference was organized in response to the request from UICC, Epidemiology Programme Chairman. The objectives of the conference are to demonstrate the epidemiological characteristics of cancers in the Developing Countries and ultimately to develop appropriate preventive measures, which are feasible in each developing country. We will welcome your participation in this conference, and will let you know more detailed information in later announcements.

Chairman of

Executive : Dr. Y. T. Omar, M. D.,
Committee Director.
Kuwait Cancer
Control Centre,
P. O. Box 42262,
Shuwaikh,
Kuwait,
Tele : 810007

Topics to be covered are :

- * Trends in Cancer Incidence (Morbidity and Mortality) in Developing Countries.
- * Risk Factors of Relevant Sites of Cancer in Developing Countries.
- * Primary Prevention of Cancer in Developing Countries at Present and in Near Future.
- * Early detection of Cancer in Developing Countries-Efficacy & Perspectives.
- * Underlying Concepts of Cancer Control Strategies in Developing Countries.
- * Prevention of Cancer Deaths in Developing Countries.

Organizing Committee

President : H.E., Dr. A/Rahman El-Awady,
Minister of public Health
& Planning

Vice President : Dr. Nail El-Naqeeb,
Undersecretary of
Ministry of Public
Health.

Chairman of
Executive : Dr. Y. T. Omar,
Committee Director, K.C.C.C.

Secretary : Dr. A/Aziz Ismail,
Epidemiology and
Cancer Registry Unit

Treasurer : Dr. Hussein El-Momen,
Director,
School Health Division

Conference : Dr. Kunio Aoki,
Adviser Professor of Preventive
Medicine, Nagoya University,
School of Medicine,
Japan.

第7回がん疫学研究会のご案内

第7回がん疫学研究会 会長 久道 茂

下記の要領で、第7回がん疫学研究会を開催いたします。多くの会員各位のご出席を期待いたします。

1. 開催日時：昭和59年6月22日(金) 9:00~17:00
2. 場所：仙台市戦災復興記念館(仙台市大町2-12-1)
3. 主 題：「がんの一次予防と二次予防」
会員によって行なわれた、あるいは行なわれているがんの一次予防、二次予防対策の成果、評価、その方法論、費用効果分析などについて発表していただき、相互に問題点を討議したいと存じます。今回は焦点をさぼるために、対象臓器としては胃、子宮頸部、肺を中心にしたしたいと思います。

4. 事務局：
〒980 仙台市星陵町2-1
東北大学医学部公衆衛生学講座
第7回がん疫学研究会事務局
☎(0222) 74-1111 (内) 2227
事務担当：清水 弘之

<追伸>

会員および関係者有志との懇親会を予定しております。
昭和59年6月21日(木) 18:00より (研究会の前日)
会場は仙台市戦災復興記念館、会費制(4,000円くらい)

The UICC Fukuoka Symposium 1984

on "Fundamentals and Clinicals of Digestive Tract Tumors"

September 30 ~ October 2

CARCINOGENESIS

TUMOR CHARACTERISTICS

DIAGNOSIS :

NEW TRENDS IN CANCER DIAGNOSIS

TREATMENT : LONG-TERM SURVIVAL AND
COMBINED MODALITY ; Key Note Lecture

TREATMENT : LONG-TERM SURVIVAL AND
COMBINED MODALITY ; Organ Sites

MULTIDISCIPLINARY APPROACH TO
CANCER PREVENTION

SUMMATION

I A C R

Biennial Scientific Meeting, 1984

1984年国際がん登録学会開催案内

国際がん登録連盟 (IACR- International Association of Cancer Registrie) の1984年の学術集会在本年9月27~29日の3日間、福岡市で開催されることになりました。

IACR は1970年に結成され、現在41ヵ国 117 地域がん登録が加盟して隔年に学術集会を開催していますが、アジアで開催されませんが今回が初めてであります。

がん登録は、がん制圧のための資料の整備、がん対策、対がん医療の評価、改善等に重要な役割を持つものですが、わが国ではまだ十分な理解が得られず、国内の各登録ともその安定した基盤の整備に苦慮しているのが現状です。この学会を真に国際学会として成功させる事が、わが国のがん登録の発展に役立つものと信じ、鋭意準備をすすめています。関連学会の会員、研究者の皆様の御協力と多数の御参加をお願い致したく、お知らせ申し上げます。

1. 主催機関： International Association of Cancer Registry
President Dr.P.Correa,
General Secretary Dr. E. Saxen
開催地組織委員会 (委員長 重松 峻夫)
2. 開催期日： 昭和59年9月27日・28日・29日
3. 学 会 場： 「ガーデンパレス」 (私学共済会館)
福岡市中央区天神4丁目8-15
5. 登 録 費： 参加費 5,000円
4. 主 題 Application of Cancer Control Registry
- and some problems -
 - ① Cancer Registry in Cancer Control Programmes
 - ② Cancer Registry in Screening Programmes
 - ③ Cancer Registry in Etiological Research
 - ④ Cancer Registry, Problems and Solutions
 - a) Completeness of Reporting
 - b) Funding and Staffing
 - c) Active Follow-up
 - d) Others
6. 学会参加登録先 〒814-01 福岡市城南区七隈7丁目45-1
福岡大学医学部公衆衛生学教室内
1984年国際がん登録学会事務局
☎ 092-801-1011 (大代)
ex 2758 又は 2763
7. 登録申し込みおよび学会についての連絡先
同上 公衆衛生学教室
重松 峻夫 (内線 2758)
増田 登 (線 2763)

日本がん疫学研究会

事務局 〒464 名古屋市千種区田代町

TEL 052-762-6111

編集責任者

愛知県がんセンター疫学部 気付 振替口座 名古屋 1-37001 青木 国雄